

あやべ出身の陶芸家・人間国宝 神農 巖さん そして前綾部市長 山崎 善也さんと 当社代表取締役社長 荒賀 誠で 特別鼎談を行いました

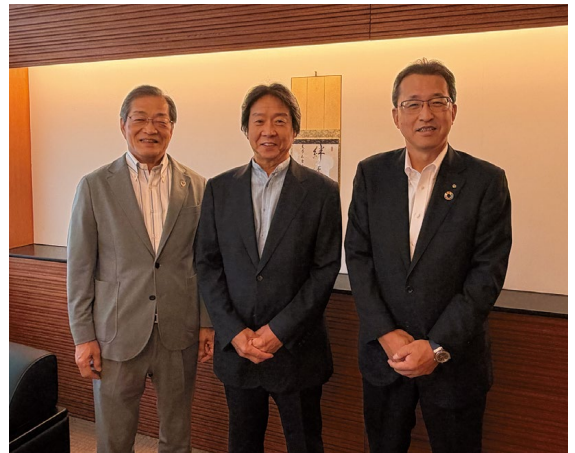
向かって左から山崎善也さん、神農巖さん
当社代表取締役社長 荒賀誠

今号は2024年に人間国宝(重要無形文化財保持者)に認定された神農巖さんと、神農さんと同級生で前綾部市長の山崎善也さんをお招きし、当社社長の荒賀誠との鼎談となりました。〈工芸〉と〈工業〉との分野の違いはありますが、モノづくりという点で大切にしなければいけないことなど多くの共通点がありました。

荒賀誠代表取締役社長(以下：荒賀) 当社が本社をおくあやべご出身、しかも自分の高校のOBに人間国宝となられた方がおられるのは、まさに郷土の誇りです。今日は神農先生と小学校からの同級生で、綾部市の前市長・山崎善也さんのお取り計らいで、お話をうかがう機会を設けていただくことができました。ありがとうございます。

山崎善也さん(以下：山崎) 神農さんはもともとお隣の福知山出身で、小学校3年のときにあやべに移ってこられた。それ以来の仲ですから60年の付き合いです。綾部中学時代はバレーボールのエースとして女の子から人気がありましたね(笑)。いわゆる代々続く陶芸家のおうち出身ということではなく、お父上は事業家。その家業を継ぐために大学の経営学科に進学されたわけですが、たまたま京都の国立博物館で中国北宋・朝鮮高麗時代の青磁の美しさに衝撃を受け、これを自分でもつくりたい、天職にしよう一念発起し新たにこの世界を目指された。ひとりで道を拓いて人間国宝にまで昇りつめられたわけです。

荒賀 先日、東京あやべ会での講演で神農先生が参加者からの質問に対し、「自身の創造性の原点は生まれ育った故郷・あやべの由良川や里山にあ



る」とお答えになったのを聞き、とても嬉しく思いました。神農先生の作品はあやべでも鑑賞できるのでしょうか？

山崎 2作品を綾部市に寄贈いただいております、ひとつは綾部市長応接室に、そしてもうひとつは綾部市中央公民館に展示されています。2011年に日本伝統工芸展「日本工芸学会会長賞」を受賞されたときに記念で寄贈されたものです。また神農さんには2025年に綾部市民栄誉賞(第一号)を受けていただきました。



神農巖さんの『青白磁堆磁線文壺』青磁は顔料を使わず釉薬や陶土に含まれる鉄分が還元焼成により発色する磁器。中国・殷の時代が起源で、朝鮮半島を経て日本に伝わる。
画像提供/綾部市



綾部市に寄贈された作品を前に山崎さん（左）、神農さん（右）
（画像提供／綾部市2011年）

神農 巖さん（以下：神農） 市長応接室にあるものは上皇皇后陛下美智子さまが皇后陛下でいらしたときに日本橋三越本店で開催された日本伝統工芸展にお出ましいいただき「宮内庁お買い上げ」となった作品と同時期につくったものです。まったく同じというわけではないけれど、姉妹作品ともいえるものです。

なに、これ!という驚き、感動が モノづくりの原点

荒賀 私ども日東精工は工業用ファスナー（ねじ）などの工業品、神農先生は芸工（芸術）作品と

ということで分野は違いますが、それでもモノづくりという点では共通するところもあると思います。

神農 先ほど御社製品の極小ねじを拝見し、また触らせていただきました。「え、なにこれ!」とほんとうにびっくりしました。驚きや感動、これがモノをつくる原点です。1ミリにも満たないねじですが、しっかりとねじ山が切ってあるんですね。しかも締める道具も別にある。ここまで精緻だとこれはもう美の世界。工房に持ち帰って若い人たちにも是非見せたいと思います。でも、この精緻なねじも簡単にできたものではなくて、御社のねじづくりの歴史・伝統のなかで生まれてきたものでしょう。

荒賀 ありがとうございます。私どもの人財教育本『人生の「ねじ」を巻く77の教え』のなかに「いい仕事には絶対美観がある～持つべきものは美意識」という項目があります。ほんのわずかな



当社の精密ねじ、極小ねじをルーペでご覧になる神農さん



山崎善也（やまざきぜんや）さん

綾部高校から九州大学へ進み、日本政策投資銀行で企業戦略部長や国際部長などを歴任。2010年から4期16年綾部市長を務める。現在は世界連邦運動協会の副会長の要職につくほか、京都産業大学の特別客員教授、福知山公立大学の客員教授として次代を担う若者を指導する。綾部市長時代に広報紙に連載していた人気コラム『善聞語録』を1冊にまとめた書籍『故郷（ふるさと）は裏切らない』が2027年1月に発刊予定

違いに敏感であれ、より良いもの、より美しいものにこだわれと教えています。

山崎 「美しい」という感想ひとつにしても、やはり人間国宝の発言だと重みが違いますね。そして確かに最初からこの技術があったわけではなく、失敗や試行錯誤の積み重ねの上に成り立っているわけですね。

神農 大学の経営学科で「PDCA (Plan Do Check Action)」あるいは「PDS (Plan Do See)」を学びました。これは、今も大事にしています。日東精工さんもそうだと思いますし、行政、まちづくりも同じだと思うのですが、プランを立て実行する、そしてそれを精査し検証し改善点を見出しては、さらに次の行動を起こしていく。陶芸の世界では窯に火を入れてからは〈火の神さま〉に委ねます。それでも土は、釉薬は……とそれぞれの調合加減などを模索、日々PDCAの繰り返しです。

荒賀 ほんとうにそうですね。当社も創業以来、88年間、ずっとその積み重ねです。ベースにあるものは大事にしつつもそこにとどまらない。

山崎 神農さんのお話のなかでよく出てくるのですが、千利休の「守・破・

離 (しゅ・は・り)」。守は伝統的な型・技を徹底的に「守る」。破は自分に合ったより良いと思われる型を模索し試すことで、既存の型を「破る」ことができるようになる。そして離は、さらに鍛錬・修業を重ね、かつて教わった師匠の型と自分自身で見出した型の双方に精通し、いわば型から「離れ」て自在となる……これにもつながりますね。

伝統と伝承は 似て非なるもの

神農 私は伝統と伝承は違うものなんだよと若い人によくいうんです。伝承は神事だったり民話などがそうですが、しっかりそのままを伝え残して



鼎談は2026年8月に当社本社応接室にて実施。
向かって右が当社代表取締役社長 荒賀誠



神農巖 (しんのういわお) さん

綾部高校から近畿大学へ進学。学生時代にたまたま出会った青磁に惹かれ、大学卒業後は試験場や職業訓練校で基礎を学び、清水焼の窯元で5年間修業を積んだ後、30歳で滋賀県大津市に工房を構えて独立。伝統的な青磁の技法を磨くだけでなく、磁土を泥漿にして筆で幾度も塗り重ねる独自の装飾技法「堆磁 (ついじ)」を考案・命名。2024年に「重要無形文化財保持者 (人間国宝)」に認定。青磁での人間国宝は神農さんひとりだけ



「堆磁」。磁土を泥漿（でいしょう＝水でどろどろにしたもの）にして、筆で幾度も塗り重ねる手法。大きな作品であれば重ねては削るの工程を60回以上繰り返し仕上げていく。装飾と造詣が一体となる神農さんのオリジナル手法で「堆磁」は神農さんの造語でもある

いくものであり、伝統は守るだけではなく、新しいものを加えていくもの。トラディショナルというとなにか古臭いものとする人が多いのですが、そうではなく革新的なものです。

山崎 もちろん神農さんの青磁も、2000年以上の歴史の延長線上にあるものですが、そこに堆磁という神農さんオリジナルの技法が加わって、新しい世界が生まれているわけですね。

荒賀 この堆磁は清水焼の製陶所で働いておられるとき、傷があるところ、欠けたところに上塗りをして修繕していくという作業の繰り返しの中から着想されたと聞きました。ふつうだとその作業をこなしていただくだけで終わるところですが……、

神農 独立してこの世界で生きていくには早くに自分のオリジナルを見つけないといけないと、常に何かを探していた結果だと思いますね。過去の名作の写しを突き詰めても、骨董商は喜ぶかもしれないけれど、そうではなく現代に生きる作家として新しい価値を見出したいと考えるようになりました。学校で基礎を学んだあと、巨匠のもとで修行する、働かせてもらうという方法もあったのですが、それだと、その師の枠を超えていくことがなかなか難しい。師匠がいればそのルールの上に乗っていればある程度の安定が保証されるわけですが、多様で高い技術や表現を身につけたいと、ひとりで進む道を選んだわけです。若かったから

こそ、できたことかもしれません。

荒賀 私どもの社是を解説する『我らの道』のなかの「行動規範」に「有意注意」という言葉があります。例えば信号が青なら進めというのはわかっていても、青だからと左右確認しないで進んでいくと信号無視の車にぶつかることが起こりうる。一つひとつその意味を考え丁寧に進めていくことで視野が広がる……こういったことがもちろん信号だけでなくいろんな状況であるわけです。今の神農先生のお話はこの「有意」にもつながるように思います。もちろん、大きな覚悟となにより大きなパッションがおありになったからでしょう。

山崎 神農さんが師匠についておられたら、この若さでは人間国宝に認定されなかったかもしれないですね。上が重しになってなかなか越えられない。神農さんが独立して滋賀県の琵琶湖のほとりに窯を築かれたのが30歳のときで、でも必ずしも順風満帆というわけでもなかったでしょうし、認められ世に出るまでにはご苦労もあったでしょう。

神農 賞などをもらうようになって、そして、たまたま美智子上皇后陛下に作品をご評価いただき、宮内庁お買い上げとなったことなどで世の中の注目度が上がったわけですが、もともと人に恵まれたことは確かで、今はもう閉めておられますが、京都東山五条の老舗有名ギャラリーの息子さんと仲良くなったご縁で、そこで個展を開かせてもら

い、いわゆる上客をたくさんご紹介いただき、そのお客さんのご意見やご要望を聞くことで、そこからまた新しいものが生まれてもきたわけです。

荒賀 オブジェ的なものだけでなく、お皿など日常的なものもつくられるのですね。

神農 じつは、はじめのうちはそれがメインでした。料理が主、花が主であり、お皿や花瓶は「脇」の存在です。しかし、その皿や花瓶がなかったら料理もお花も成り立たない。主役ではないけれど、なくてはならないもの。そこに自分の世界も表現していく。これは御社のねじとも同じですね。

荒賀 そしてお客様のニーズを踏まえて、結局、喜びや満足、感動を与えていくという点でも共通するものですね。神農先生の公式サイトには『表現』は『あらわす』と言う漢字を二つ重ねて書く。ひとつ目の『表す』は技術（skill）で、もうひとつの『現わす』は想い（will）」とあり、「このskillとwillのバランスが大事」とありました。いくら高度な技術があっても、発想力、強い想いがないければ形になりません。逆にイメージがいくらあっても技術が伴わなければ、形になりません。お互いを自分の中で高めていくことが大事だと。

神農 私が大切にしている言葉に「琢磨同時（そったくどうじ）」もあります。これはもともととは卵から孵ろうと雛が内側から殻をつつくの、親鳥がそれを外側からつついてヘルプするということで、常から制作のことが頭にあり考え続けますと、思考が熟したときにハッとする気づきが舞い降りてきます。これをしたい（will）と閃いたり、試したいと思ったりしたときに、その技量（skill）がしっかりついているように日々鍛錬していくこと、これが私の琢磨同時だと思っています。

荒賀 常に進化されているわけですね。

神農 昔つくったもので評判がよかったものをまたつくってと要望されることもあります。

山崎 それに応えるほうが〈商売〉で考えれば効率がいいかもしれない。

神農 もちろん、作品を振り返って基本に立ち返ることはありますよ。しかし過去の自分と今の自

分は違う。目指すべきものがあるので、過去のをコピーすることはありません。

山崎 作品の素晴らしさだけでなく、こういった人間性も含め、神農さんが「人間国宝」に認定された理由がわかります。

荒賀 今日は仕事を進めていく上で、改めて肝に銘じたい貴重なお話をうかがえました。ほんとうにありがとうございました。



本社エントランスにて

神農さんの展覧会情報

9月15日までは東京日本橋三越で「第73回日本伝統工芸展」が開催され、神農さんの作品も出展されています。この「日本伝統工芸展」は全国を巡回する予定で、9月25日から10月5日は愛知（古川美術館）、10月7日から12日までは京都（京都高島屋）、10月14日から18日までは大阪（大阪高島屋）など。

神農さんの作品や情報は公式サイト
<https://shinno-ceramics.art/>

トイレトラック 震災被災地の熊本へ

「みんな元気になるトイレ」は災害時の衛生確保を目的とした災害派遣トイレネットワークプロジェクト。当社が本社をおく綾部市もこれに積極的に協力していて、当社でも趣旨に賛同し、トイレトラックの購入・運用費用の一部を寄附。7月24日にトイレトラックのお披露目式が、綾部市役所にて執り行われました。もちろんそのときは、4日後に発生する熊本地震を予期していたわけではありませんが、結果、現在はこのトラックが熊本県宇城市へ派遣されています。被災された方々へお見舞いを申し上げますとともに、厳しい状況が日々、改善されていくよう心より祈願いたします。



「ファスニングジャーナル」で 当社&当社グループを特集

先月号の本欄では「金属産業新聞」の特集記事を紹介しましたが、7月27日発行の「ファスニングジャーナル」紙では日東精工グループの特集が掲載されました。当社本社がある綾部市までお越しいただき、代表取締役社長の荒賀誠をはじめ、日東精工SWIMMYの檀野佳子社長、東陽精工の波多野嘉和社長、日東公進の石丸元国社長をインタビュー。「創業の地・綾部を軸に課題対応で着実な歩み」という見出しで大きくご紹介いただきました。



「きょうとみらい博」で ねじの魅力をアピール

「きょうとみらい博」は、小学生から高校生とその家族を対象にした「仕事」や「社会」に触れることができるイベントで、京都府や京都市の教育委員会が後援をしています。今年も7月25日に京都市勤業館「みやこめっせ」で開催され当社も出展しました。

当社タッピンねじを使った「ソーラミニカー組み立て体験」や0.6ミリ極小ねじの「ねじ締め体験」「ねじ本数当てクイズ」「ねじ間違い探しクイズ」などのプログラムを用意し、次代を担う子どもたちに、ねじの魅力をアピールすることができました。



右の写真は参加した当社のスタッフ。顔の部分を切り抜いた「ねじくん」パネルでの撮影も好評でした

「あやべ良さ来い」に 社長がサプライズ参加!?

綾部市商工会議所主催の「水無月まつり」はあやべの夏の風物詩。例年、当社では祭りに華を添える花火に協賛のほか、祭り（花火）が終わった翌日の河川清掃に多くの社員がボランティア参加しています。また、「あやべ良さ来い」にも毎年チームを編成して参加しています。今年もさまざまな形で祭りに協賛をしましたが、「良さ来い」に当社社長の荒賀誠が飛び入り参加するというサプライズがありました。当社が「良さ来い」に初参加したのは18年前ですが、そのときのリーダーがじつは荒賀でした！当社では今後もトップが率先して、地域の活性化に貢献してまいります。



上は今年の「良さ来い」チームと荒賀社長。下は花火の翌日に清掃作業に参加した当社関係者

未来を創る！ 「人を惹きつける 成長企業視察研修」

りそな総合研究所が毎年、企業の経営者や幹部を対象に視察型研修プログラムを企画しています。当社が昨年「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞『地方創生大臣賞』を受賞したこともあり7月27日に41名の方が当社を訪問。社長荒賀の講演、工場見学、グループディスカッションなどの研修を受けられました。



「令和8年度綾部市 篤志者表彰」を受賞！

当社では、メディカル事業のさらなる発展につながる取り組みの一環として、本年4月に綾部市立病院へデジタルサイネージ12台を寄贈。今般、その取り組みを評価いただき、「篤志者表彰」を受賞しました。日東精工では「誠実・信頼・感謝」の心を大切にし、これからも地域社会とともに歩んでまいります。



当社と立命館大学、そして綾部市とで包括連携協定を締結 PFAS分解技術開発を契機に産学公連携による 地域共創モデルを構築していきます

このニュースレターの昨年10月号でもご紹介しましたが、当社では立命館大学と「PFAS（有機フッ素化合物）を可視光で分解するフロー装置の開発」に関する共同研究開発を締結しています。社会問題となっている水質汚染に対して、立命館大学的小林洋一教授のPFAS分解研究と、当社のフロー装置を組み合わせることで問題解決を目指すのですが、今般、この研究成果を社会実装へとつなぐべく、新たに綾部市を加えた産学公連携へと発展させていくことにいたしました。

8月4日、綾部市役所において、当社と立命館大学、

そして綾部市とで包括的事業協定を締結しました。今後は三者が協力し、それぞれの人的、物的、知的資源を活かしながら、これまで進めてきた環境面はもちろん、さまざまな地域課題の解決や地域産業の振興、そして持続可能な社会の実現を目指していくものです。

あやべで創業した日東精工の技術力と事業化ノウハウ、立命館大学の教育・研究資源、そして綾部市の地域ネットワークを組み合わせることで、地域産業の高度化や新たな産業の創出、そして次世代人材の育成へとつなげていくものです。

■協定内容

★協定に基づき、日東精工、立命館大学および綾部市は、次の事項について連携・協力を進めます。

1. 地域産業の振興、創出及び支援に関すること
2. 産学公の連携に関すること
3. 地域課題の解決及び持続可能な地域社会の形成に関すること
4. 研究、技術開発及び研究成果の社会実装に関すること
5. 環境保全に関すること
6. 人材の育成、交流に関すること
7. 文化、教育の振興に関すること
8. まちづくりの推進に関すること

8月4日に調印式が行われました。左から当社代表取締役社長荒賀誠、四方源太郎綾部市長、仲谷善雄立命館大学学長。調印式の後は、3者による記者会見も行われ、全国紙をはじめ多くのメディアから注目されました

綾部市 RITSUMEIKAN NITTOSEIKO
綾部市・立命館大学・日東精工株式会社
包括連携に関する協定締結式



【誠の言葉】④

締めてゆるめて、人とねじ

代表取締役社長 荒賀 誠

今

から12年前に当社の人財教育を一般の方向けに『人生の「ねじ」を巻く77の教え』という書籍として一冊にまとめ、ポプラ社から刊行しました。そのとき、評論家でテレビなどでも活躍する山田五郎さんが、担当編集者との縁から、全国紙の書評欄でこの本を大きく取り上げてくださいました。

〈締めてゆるめて、人とねじ〉は、その書評の大見出しです。

「精密ねじで日本一のシェアを誇る会社の社員教育用のテキストを1冊にまとめた」と聞けば、時計好きとしては見逃せない」と書き、

「締めるときはきっちり締め、加減すべきときはゆるめ、ときにはリフレッシュ。まさに人生の極意といえる。サラリーマンになるべきは組織の歯車ではなく、ねじ

だろう」と締めくくり、ねじの大切さやその機能の奥深さを、そして当社の人財教育についてユーモアを交えながら、わかりやすく紹介くださいました。

テレビや雑誌のレギュラーも多数、YouTube「山田五郎のオトナの教養講座」は90万人超えの登録者数を誇る人気番組。今後のますますのご活躍が期待されていたのですが、残念ながら7月に訃報に接しました。心よりご冥福をお祈りいたします。山田さんの素敵な書評・その洞察力に改めて敬服し、感謝申し上げます。

人生の「ねじ」を巻く77の教え

日東精工株式会社企画室著 山田五郎監修



「人生の「ねじ」を巻く77の教え」は、人生の様々な場面において、どのように「ねじ」を巻くべきか、77の教えが示されています。本書は、人生の様々な場面において、どのように「ねじ」を巻くべきか、77の教えが示されています。本書は、人生の様々な場面において、どのように「ねじ」を巻くべきか、77の教えが示されています。

※YouTube山田五郎「オトナの教養講座」はアーカイブで楽しめるほか、さまざまな趣向を凝らし、山田氏亡きあともチャンネル登録者数100万越えをめざしている

「幸せ」を見つけるヒント 9月

女性が活躍するあやべ！

カトリックの修道女は一般にはシスターですが、ときにマザーと呼ばれる人もいて、ノーベル平和賞受賞のマザー・テレサもそのひとり。ではシスターとマザーはどう違うのかを調べてみたら、マザーは新しく修道会や、学校などを創立した修道女のことを指すそうです。そこで、日本でマザーと呼ばれる人がいるのかを確認したところ、聖心学院で理事長を務め、その後、静岡と札幌に系列の学校を新たに設立した女性が、マザー吉川茂仁香と呼ばれていることがわかりました。日本ではあとも先にもマザ

ーと呼ばれるのは彼女だけのよう。そして、じつはそのマザー吉川茂仁香はあやべ出身なのです！

大本の出口なお開祖も女性ですし、グンゼは〈表から見れば工場、裏からみれば女学校〉といわれるほど〈女子教育〉に力を入れていたという歴史もあります。あやべは女子が活躍できる、女性が道を拓いていける土壤があるといえるのかもしれませんが。

先日は綾部商工会議所の女性部会で講演する機会に恵まれました。日東精工も女性が活躍できる環境づくりを大切にしています。

日東精工代表取締役会長 綾部商工会議所会頭 材木正己



8月12日、綾部商工会議所の女性部会で講演する機会に恵まれました。



発行：日東精工株式会社経営管理本部経営企画室

当社ホームページでは本ニュースレターのバックナンバーほか、事業や新製品のより詳しい情報を閲覧いただけます